

# ま ら め き ☆



**第38号**

## 『大行進中 in おやつ とられそうかも』

各施設ホームページには、法人ホームページからアクセスしてください。

<http://hakukou-kai.or.jp/>

各施設のホームページにメールボックスがあります。ご意見、ご感想をお寄せください。

平成27年10月31日

社会福祉法人 薄光会 広報委員会発行

本部、太陽のしずく

〒299-1607

千葉県富津市湊 1070-3

TEL 0439-67-3711

ケアホームCOCO

豊岡光生園

〒299-1742

千葉県富津市豊岡 3535-1

0439-68-1711

相談支援センター天羽

三芳光陽園

〒294-0825

千葉県南房総市上堀 280

0470-36-3211

鴨川ひかり学園

〒299-2854

千葉県鴨川市代 1297

04-7099-3311

ひなたホームズ

湊ひかり学園

〒299-1607

千葉県富津市湊 934-18

0439-70-6551



「いっと小さき者の一人」の幸せが確保される  
ことなくして社会の幸福はあり得ない。

COCOの住人三十三名のひとりひとりの幸せを  
考えること。ひとりひとりの「暮らし」「人生」に寄  
り添うこと。障がい者がグループで生活しているこ  
ころではなくて、ひとりひとりが地域の住民として  
暮らししているということ。

この地域に暮らし始めて、早九年。

「出て行け」とは言われたことはない。しかし、諸  
手を挙げてウエルカムかという決まらずでそうではな  
い。どうやらここに暮らし始めてもいいかもしれない。  
大丈夫なようだ。恐る恐るという感じだった。ここ  
で暮らすことは当然の権利だなんて思えなかった。

休日には、みんなとぶらぶら散歩に出かけた。道  
行く人に返ってこない挨拶を何度も繰り返した。幾  
度となく失敗もした。迷惑をかけながらも暮らし続  
けてきた。特別なことをしてきた訳ではない。毎日  
の暮らしの中で、「住民のひとり」として地域の方と  
ふれあってきた。夕飯の食材をスーパーに買いに行  
き、髪がのびたので床屋さんや美容室に行き、たま  
の休みに、喫茶店でお茶したり、定食屋で食事をし  
たりした。

地域の方全員にみんなのを受け入れても  
らうことは難しいかもしれない。それでも、ひ  
とひとりとの関係が少しずつ広がることで、  
少しずつ受け入れてもらっていると感じられる  
ようになる。この感覚は、現場でないと味わえ  
ない。言葉では伝えづらいのである。その感覚  
は、たくさんの冷や冷やした失敗の積み重ねの  
賜物なのである。

『ほつり出されたおれたち』江尻彰良氏の喫茶  
店の砂糖水の出来事は、受容される感覚が表現  
されている私の大好きなエピソードである。

はちの樂寮の人たちがいつも利用している喫  
茶店から、苦情がくる。休日に何人かでその  
喫茶店でコーヒーを飲んでいる。そのうちの  
一人が、シュガーポットに入った砂糖で砂糖水  
を作って飲んでいるとの苦情である。それも毎回  
その砂糖を全部使ってしまうとのことなのだ。

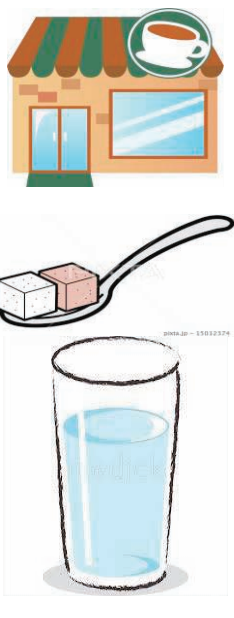
江尻さんは、喫茶店を利用している何人かに  
喫茶店の人が困っているという話をする。だが、  
喫茶店の出入りを禁止したりはしなかった。そ  
の後もその人は喫茶店を利用し続けるが、さ  
すがに砂糖水は作らなくなった。そのうちに喫茶  
店の人が、サーブスで砂糖水を作ってくれるよ  
うになったそうである。

「地域交流しよう！」なんて行事の企画をする  
ことはないのです。暮らしの中に、自然なかたちで  
関係つくりの機会がたくさんあるのです。

さあもう福祉の対象者としてではなく、地域の生  
活者の一人として暮らしを創っていきましよう。

『ホームライゼーションとは、単に障害を持つ  
ものと持たぬものが同じ地域に住むことではな  
い。お互いのふれあひにより、相違と多様性を  
認識し、理解し、受容し、新しい文化を創造す  
ることにある。共住すること目的があるので  
はなく多様性における共存への深い願いが込め  
られている。』

(阿部志郎氏 『福祉の哲学』より)



CH COCO 井上





# ひかり通信

『目指せ！』

意思決定支援』



「今度のきらめきは、意思決定支援について書いて下さる」

「何も考えず」はい、わかりました」と二つ返事で応えはしましたが、はてさて何を書けば良いのやら。

「迷いながらインターネットで検索してみると、

「意思が伝わりにくくても、必ず本人の意思は存在する」

「支援者の判断のみでサポートするのではなく、当事者の意思決定を待ち、見守り、主体性を育てる。その支援こそ、共生社会を実現する基本である」云々。とても分かり易くナイスな解答が出てきました。

なお、本人の意思であれば何でもOKではなく、また、意思決定がなされて終わりのでもなく、それを見守り支援することが重要であり、我々の生業の中でも大切なことの1つである。これは私の考えでもありません。

さて、ここまで書いてみて、疑問に思うことがあります。言葉やジェスチャーで自分の意思や要望を伝えられる方については、本人の希望に寄り添うような支援を行えば良いのですが、自分の気持ちをなかなかうまく表現できない方へはどうしたら良いのでしょうか？



(中川)

私も胸を張ってそう言い切りたいものです。

誰かが言っていました。金はないけど愛ならいっぱいあるよ、と。

もしかしたら色々なものが見えてくるのかもしれないですね。



私の想いは「支援者がしっかりとその方の希望や要望を汲み取り、足りないところを補えば良い」ということなのですが、それがとても難しいのです。日常の支援の中で「本当にそうなのだろうか」と自問自答を繰り返し、場合によっては「申し訳ない」と、こちらの都合で物事を進めていると思えることも正直あります。そんな時は「お前、そうじゃないぞ」と冷たい視線を背中に感じるのです。

日々、様々な人達と一緒に過ごし、笑い、怒り、時には悲しむ。そうした時間の積み重ねが、この人をもっと理解したいという願いになり、願いを持ち続けることで、言葉によらずとも、ちょっとしたくさや表情から思いは伝わってくるのだと気づくようになる。私はそう信じています。その中に、ほんのちよっぴりスパイスで「愛」なるものをふりかければ、もしかしたら色々なものが見えてくるのかもしれないですね。

## 『ステキな会話』

ある日の外出車内。さまざまな会話で盛り上がる金高さんと川間さん。そこに尾高さんも乗車していたので、私は「尾高さんも混ぜてよ」と二人に声をかける。一瞬の間があった後、金高さんが「尾高さん、今日の昼メシおいしかったね」と声をかける。私が思わず笑うと、

「何？ 変だった？」と問う金高さん。

「いや、あまりにステキでさ」と私が言うと、すかさず川間さんが

「昼メシおいしかったねー」の一言。

会話に仲間入りできた尾高さんは指を二本、二本出したりしてニコニコしていた。

(にやり・ほっと報告より)



『今年も力作揃い！ 鴨川ひかり案山子』



ベストフレンド



妖怪案山子



ディズニー案山子

たのくろの里では「千倉館賞」。みんなの里では「準優秀賞」「さわらび賞」受賞しました。

# ココ de COCO



## 『暑かった夏』

今年も暑い夏でした。職員がバテ気味でも、入居者の皆さんは実にたくましく暮らしています。食事もりもり食べ、週末にはホームでビールを飲んで、居酒屋さながらに楽しんでます。

特にあけぼの荘の熊谷さんは、実においしそうに飲みます。

側で指をくわえて見ている私に「美味しい〜」と言わんばかりに、ビールを満面の笑みで飲み干しています。



近くにいた長井さんも「俺にはないの?」とやって来ます。

機会があれば、みんなで近所の居酒屋に出かけたいものです。熊谷さんや道博さん、酒好きなメンバーで、酔って騒いで、カラオケ? と、秘かに考えています。職員の私は仕事ですので、当然ですが、飲酒はできません。たぶんできません。ちよっとくらいは……。やはり羨ましそうに眺めているだけですけど。(本当に残念)

お盆の帰省のとき、ホームに残った道博さんには、ビールの差し入れがありました。だが、一本飲んで物足りなさそうにしています。ビールの空き缶をそっと職員の方にすらして、「もっと無いの?」

との訴えがあり、「今度はもっと用意しておきますね」との声かけに、ムスツと不満そうな表情をしていました。

はだしてCOCOで一番の酒豪は誰でしょうか? 今度飲み比べしてみたいなんて思います。ただ飲みすぎには注意しましょう。私みたいに身体を壊してしまいますから。

『ごちうけやキッチン』

料理好きな吉野さんは、今年の五月から地元の上総湊のパン・和菓子教室に隔週(第一、第四月曜日)通っています。年配の先生(和菓子職人)が教えてくれます。生徒さんは吉野さんより年上の方たちばかり、どうなるかと心配してしまいましたが、教室から戻ると楽しかったと話が尽きないほどでした。



長谷川和之

吉野さんからお話を聞いています。



「吉野幸子です。料理が好き。五月からパン教室に連れて行ってくれて、最初は、おばさんばかりでびびくりしたけど、上手にパンができるのと、のどかみんながおいしいって喜んで食べてくれるのがすごくうれしい。作ったのは、アンパン、カボチャパン、さつまいも入りパン。和菓子がうまくできなくて残念だったから、みんなに喜んでもらえるようまたがんばりたい。」

地元の方々十数名と一緒に過ごす時間は、吉野さんにとって、とても大切な時間です。だって吉野さんのことを分かってくれる方が増えるんですもの。

康子





# 光陽

## 『記憶に残る快記録』

今年の敬老会は今までと何かが違う。

私が光陽園で働き始めてから、十三回目の

敬老会。今までも百歳（百寿）のお祝いの方は何人かおられました。今年は各ユニットに

一名ずつ百寿のお祝いの方が、つまり三人も百歳になる方がいらっしやるのです。他にもショートステイ利用者二名、デイサービス利用者一名、計六名の方が百歳のお祝いの日を迎えることになりました。

私の記憶の中では新記録!! いやいや、三芳光陽園開園以来の快記録です。最高齢の三人の方々は、お元気で足腰もしっかりされています。その三人の方々のエピソードを紹介します。



一人目のハルさん。敬老会数日前に転倒し足の指を骨折してしまいました。けれども、シップ薬と痛み止め服用のみでよくなってしまったのです。車椅子に乗っていたのが嘘のように自力で歩いておられます。本当にお元気で、ハルさんのお人柄でしょう、恵比須様のような底抜けの笑顔と笑い声を振りまいています。二人目は、りんさん。三芳光陽園に入所された当初は、トイレに座ることも難しい様子でした。でも、今では手すりに掴まりながら歩いて行かれます。お風呂も機械浴ではなく一般浴に入るようになりました。大したものです。お話し好きで、何よりも食へることに

が大好きで、御飯は残さず食へるりんさんです。

三人目は、やいさん。職員の手を煩わせたくないのか、自分でタンス内の整理をされます。時にはベッドに座り損ねてけたりしますが、身の回りのことは自分でするやいさんは、気丈な方です。周りをよく見ておられて、気遣いもさりげなくされる方です。

『よく笑い』『よく食へて』『できることは自分で行う』『これが元気で長生きする秘訣だ』と、三人の方々に教えられています。これからも個性的に、そして元気に長生きをしていただきたいものです。そして、いつの日かテレビで日本人の長寿者として紹介されたら素晴らしいと思います。

### 『紅白まんじゅう』

丸山

九月十三日。毎年恒例の敬老会。三人の百寿の方が主役です。そのお一人、やいさん。やいさんは、吉野作造が大正アモクラシー、民本主義を唱えた大正五年の生まれ。満州事変が起きた昭和六年に十五歳を迎え、その後の日本の激動期を生き抜いてきました。大変な苦労も背負ってきたに違いありません。

\* \* \*  
敬老会の数力月前のことです。

『石井さん、敬老の日に皆さんへ紅白

まんじゅうを配りたいんだけど……。』



『やいさん、皆さんって、ここにいる皆さんのことですか?』

『いやいや職員と入所者全員です。』

同じユニットの二十人でなく全員か。それはすごい数になるなあ。少し迷いながら、入所者と職員の人数を書いたメモを渡しました。

『ありがとうございます。』と、満面の笑顔。

\* \* \*  
数日が過ぎたある日、

『この前もらった人数なんだけど、洗濯場の人も入ってる?』と、心配そうなやいさん。

『入ってますよ。』

『厨房さんは? 掃除の人は?』

『大丈夫です。職員全員の人数ですよ。』

『そうですか。ありがとうございます。』と安堵の顔。やいさんの言葉には、百寿のお祝いのときを共に過ごす皆さんへの気配りや感謝の気持ちが込められていると感じました。

\* \* \*  
後日、やいさんからの紅白まんじゅうが配られました。

『やいさんから皆さんへおまんじゅうをいただきました。百寿おめでとございます。』

たたくさんの拍手が起りました。

『ありがとうございます。』

やいさんは涙ぐみます。普段食が細い方が、両手におまんじゅうを持ち、嬉しそうに食へ始めました。紅白まんじゅうが食欲の秋を呼んだようです。

やいさん百寿おめでとございます。これからもよろしくお願ひしますね。

石井

# 太陽のしずく



『ヒマワリプロジェクト』

今年の夏は、蒸し暑く連日の猛暑でクタクタになってしまっただけ。ここまで暑くなったら、夏をとにかく満喫するしかありません。水浴び、スイカ割りにも興じました。

水をかけられてキャーキャー歓声が上がっている敷地の隣には、太陽のしずくの畑があります。この春みんなでまいたヒマワリが見事に咲いて、もう種の取り時のようです。

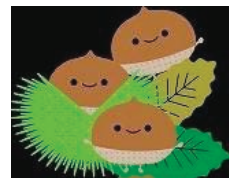
一輪咲くことに感動し、同じ方向を向いて成長していくヒマワリにパワーをもらいながら、元気なひと夏を過ごしました。一面に大輪のヒマワリが咲いているところを思い描くだけで、微笑みがこぼれてきませんか？



『わたしは、あなただけを見つめます。』ヒマワリは、たくさんの人を見つめてくれたのでしよう。たくさん元気と笑顔が太陽のしずくでも生まれました。



そんな元気を皆さんにもお届けしたいと、皆で一生懸命種取りをしたのです。ぽろ、ぽろ、ころ、ころ、面白いように種はテーブルに落ちていきます。それはそれは、皆で一心に取られました。なんだかとてもうれしくなりました。



荒木

『歩き王に、俺はなるー！』

私は歩くことには自信がある。趣味は散歩だし、仕事でも家の中でも落ち着きなくいつもウロウロと歩き回っている。そんな私が太陽のしずくに就労して一年ちょっと。私の中の歩くことに対する自信が、少しずつ失われつつある。なぜなら、ここには私以上によく歩き、よく動き回っている人がたくさんいるからだ。

だが、私だって負けてはいられない。気分はどこかの海賊さながら。『太陽のしずくの歩き王に、俺はなるー！』と、宣言する。



という訳で、太陽のしずくで特によく歩いていそうな何人かに万歩計を付けてもらい、誰が一番歩いているのか計ってみることにした。参加メンバーは、春男さん、鶴野さん、友大さん、和美さん、そして私の五人だ。ジョブ活動が始まる前に万歩計をセッティングし、いざ勝負！

皆それぞれのジョブ活動で、買い物や水汲みに出掛けたり、お弁当箱を洗って納品に行ったり、空き缶を洗ったり漬したりと、一生懸命頑張っている。かくして、一日の仕事が終わり、ホームに帰る前に皆の記録をみることにした。

まず、ただ一人女性で参加してくれた和美さんの記録は二〇〇歩だった。日中計っただけなのに二〇〇歩って、結構凄いと思うんだけど……。他の皆はどうだろうか？

では続いて友大さんの記録は……なんと二九歩！ 忍者か！ どんだけ忍び足で一日過ごしていたのだろうか……。逆に凄いわ。

さあ次は鶴野さん、あれ？ 万歩計が見当たらない。どうやらどこかで外れて（外して？）しまったようだ。残念。ちなみに私の記録は八〇〇歩。ということは、この時点で優勝は私か春男さんのどちらかに絞られた訳だ。しかし自慢じゃないが、この八〇〇歩という記録は簡単には追い越せないだろう。ふふふ……。優勝は私で決まりだな。なんて思いながら春男さんの記録をみる……。……

な、な、なんと！ 九二〇歩だとい？ 凄すぎる！ という訳で、第一回太陽のしずくの歩き王は、春男さんでした！ おめでとうございませう！ 果たして第二回があるのかどうかは分からないけど、次は私も負けなぞ。



山田



# 学園新聞

## 「ぼくらは突撃探検隊！」

取材

おやつが大好き！ なにより大好き！ 食欲の秋ということで、そんな放課後等デイサービスのみならずは美味しいおやつを求め、地域のいろいろなお店に出かけています。

今回訪れたは大賞にある「クローンヌ」さんと富津にある「野口製菓」さん、それに金谷にある「カフェ・エドモンス」さんです。

クローンヌさんは温かくほっこりとした気分になるお菓子屋さんで、一つ一つのお菓子がとてもかわいらしくラッピングされ、素材にもこだわっていて味も最高。なんと移動販売も行っており、すべてに依頼して学園に来ていただきました。

お店が学園に来てくれるなんて初めてのことで！ みんな少し緊張気味でしたが、笑顔で挨拶してくれる店長の高橋さんに緊張も次第に和らぎ、食べたいお菓子を選びはじめました。「これとこれとこれ」夢中で何個もとってしまったり「えーっと……どれにしようかな」美味しそうで中々選ぶことが出来ない子、「ぼくはこれー」とすべに決めるみんなとても楽しそうに選んでいました。一人一人に袋詰めをして下さったのも嬉しすぎて、買ったクッキーの入った袋を振り回してしまい、大切なクッキーが砕けてしまう人もいました。



今後は店長さんを講師に招いてお菓子作りにもチャレンジしてみようと、ただいま計画中です。野口製菓さんは駄菓子屋さんのような、懐かしい雰囲気があるお店です。

みんなおやつの買い物では洋菓子を好んで選んでいたのですが、最近、学校でドラえもん歌に合わせて手話を発表したのが影響したのか、和菓子にも興味津々で、多くの子がどら焼きを選んでいました。また、ガラス越しにおまんじゅうを作っているところを見学させていただいたのですが、それぞれ材料がみるみる内にお店で売っている商品へと形を変えていくので、「これになった！」という驚きや感動の音がみんなから上がったことがとても印象的でした。



カフェ・エドモンスさんではなんと！「コーヒー豆の試食をさせていただきます。はじめはみんな苦い顔をしていたのですが、「大人の味だね」と最後はにっこり笑顔。普段できない貴重な体験でした。



これからも、放課後等デイサービスはステキな出会いを求めて、いろいろなお店を探検したいと思います。

(畠山)

## 「またね」

長年、苦楽を共にしてきたしょういちさんが、六月で湊ひかり学園を卒業し、七月から親元を離れて暮らすことになった。思えば、湊ひかり学園で入浴していただいたしょういちさんと入浴支援を担当していた頃は、ある意味、裸の付き合いと言えぬのではないだろうか。「エプロンを食堂に持っていたよ」、「エプロンをかばんにしまったよ」、「歯ブラシの台をかたつけたよ」と、手を引っ張って教えてくれたしょういちさん。

「ありがとう」と言ったら、手をたたいてよろこんでくれたしょういちさん。うれしそうにピアノを弾いていたしょういちさん。



演歌が大好きで、ラジカセを持ってきて聴いていたしょういちさん。卒業の日のお別れ会では、贈られたTシャツを着て、めいっぱい笑顔を見せてくれたしょういちさん。そのしょういちさんは、湊ひかり学園にはもう来ない。来なくなってもしばらくは、食堂のいつもの席で、いっしょに昼食を食べているような気がした。帰りの車に乗るとき、ラジカセから大好きな演歌が聞こえてくるような気がした。

行った先でもしょういちさんはきっと楽しく過ごしているんだと思う。ぼくのことなんか忘れてもいい。でも、学園祭にはきくと遊びに来てね。みんな会えるのを楽しみにしているから。

(室田)



